

進路指導の取り組みの中から 「卒業生の姿から学ぶ」 ～卒業生・企業・事業所から学ぶ～

「向日が丘のキャリア教育」の全校研究を始めた平成24年当初から進路指導部より「卒業生の姿から学ぶ」という企画が提案された。進路先の事業所や企業から担当者や卒業生を招聘し、卒業後の生活や仕事について全校の教職員が学習を行った。

進路指導部

1 はじめに

進路指導部では、平成23年度に卒業生へのアンケートを実施し、そこから見えてくるものをまとめました。

アンケートは、30年前にさかのぼり、卒業後「就職された方」「就労支援のサービスを受けておられる方」「通所授産のサービスを利用された方（通所授産は現在ありません）」を合わせて196名の方に送付しました。バブル崩壊、リーマンショック、福祉制度の変遷など、卒業生が置かれている現状は厳しいものがありました。会社の倒産やジョブマッチングなどにより転職された方もおられました。もちろん、学校で身につけた力を存分に発揮して活躍されている方もおられました。卒業生の「今」を把握し、何が必要なかを考える機会となりました。

また、その後、学校の重点目標に「キャリア教育」が位置づけられました。まずは、教職員が学習していく視点として、卒業した生徒や送り出した先の事業所、企業から、学校で育てたい力とは何なのかを学習することになりました。

2 卒業生へのアンケート

卒業生の方が、よく学校に来られます。相談に来られたり、仕事の帰りに寄られたりします。PTAの同窓会の取り組み、クラス・グループでの同窓会の企画、寄宿舎夏祭り、寄宿舎有志主催「げんごろう」の取り組み、旧担任を中心としたアフターの取り組みなど、卒業生への支援はさまざまです。

そんな中、卒業生の方の現在の生活の状況を知り、卒業までに育てたい力を検討するためにアンケートを実施しました。卒業後、福祉施設に進まれた方へのアンケートは平

成18年に実施したので、今回は、就職と就労支援に進まれた方に限定しました。

項目は以下の内容です。

「今の自分のこと」

①性別、②年齢、③家族構成

「今の仕事について」

①勤務期間、②通勤方法、③通勤時間、
④勤務時間、⑤仕事・作業の内容、⑥楽しいこと、⑦つらいと感じる事

「工賃や給料について」

①1か月の工賃・給料、②給料等の使い道、③小遣いの有無と使い道、④休みの日、

⑤加入している保険

「余暇や休日の過ごし方について」

①休みの日にしていること、②これからしてみたいこと

「困った時について」

①相談に行くところの有無、②相談に行くところ、③今困っていること

「卒業した学校について」

①向日が丘養護学校で思い出に残る楽しかったこと、②学校で学んで役に立っていること、③学校時代にもっとしておけばよかったと感じること

3 アンケートからの考察

まず驚いたのが、転居のため住所不明で55通が戻ってきたことです。未返信の方も含めて、現在どういう生活をされているのか、社会・家族・親族とのつながりがあるのかなど、想像するしかありませんでした。

「生活の概要」

大多数の方が保護者と同居されており、親の扶養として健康保険に加入されていました。安定した生活基盤を考えると、心もとない状況です。

「仕事の状況」

勤務年数は10年未満が多く、年齢から考えると卒業後の進路先からは別のところへ転職されていることがわかりました。

離職に関わる相談の場としては、支援センターや学校、福祉事務所へというのは、思ったより少なく、身近な家族と相談されていました。一般就労の方の相談の場としては、しょうがい者就業・生活センター「アイリス」のことを知っていただく必要を感じました。

業種としては、物流、リネン、介護、清掃、事務処理、軽作業など多岐にわたっており、週2日の休みを取りながら1日8時間労働が一般的であり、残業もこなしている様子もうかがえました。

工賃・給料は、職種に応じて違いがありますが、自立して生活するには低賃金で、給料は、家族に渡したり貯金をしている方が多かったです。

仕事上で評価を受けた時や難しい仕事が一人でできた時、工賃・給料で自分の好きなことができる事にやりがいを見出しておられました。

「学校時代を振り返って」

体育祭、修学旅行、寄宿舎生活など、行事を中心として仲間と関わった体験が思い出としてたくさん残っている様子でした。学校で学んだコミュニケーションの取り方、挨拶、集団の中での頑張れたこと、寄宿舎での生活が社会に出て役立っているようです。これは、本校が取り組んできた「集団」「縦割り」などを大切にしてきた結果だと受け止めています。

生活に役立つ力としての読み・書き・計算などの教科学習などをもっと学んでおけばよかったと振り返る方もいました。

卒業までに身につけておくべき力や学校教育として大切にすべき取り組み、仲間との育ち合い、地域での豊かな生活、自立と社会参加等、アンケートから見えてきたことがいくつかありました。

4 卒業生の姿から学ぶ取り組み

進路指導部としては、就職に向けての「育てたい力」「必

要な力」ではなく、重度の生徒も含めた「育てたい力」「必要な力」を見直すため、卒業生がお世話になっている事業所や企業の方、卒業生を招いて、全校研修会で講演していただき、学部研では、事前にお話しいただいた内容をビデオで教職員に報告しました。以下は、これまで「全校研修会」「学部研修会」で講演いただいた事業所や企業の方のお話の抜粋です。

①「クラウディアコスチューム株式会社リース部」(結婚式衣装のリース) 課長代理の方、主任の方、卒業生の話

- ・コミュニケーションや人とのつながりが大切。できなくても努力して一生懸命することで、周りは認めてくれる。その子が持っている得意なことを伸ばす。できないことは、できなくてもよい。全部がバランスよくできないことが障がいということではないかと考えている。

②重度の知的障害の卒業生が多く通所している「あらぐさ」センター長さんから

- ・学校時代の先生たちの手があるうちに、基本的な生活習慣「食べる」「寝る」「出す」といった土台となる力をしっかりつけてほしい。また、支援を受けて生きていくためには、人への信頼が大切である。

③「あらぐさ」に通所している卒業生の保護者から*1

- ・社会に出て、この子たちは物を作りだしたりといった貨幣価値は生み出せないが、地域で毎日元気に通って生きている姿を周りに見せる事で周りを変えていく。それがこの人たちの仕事。寄宿舎での生活は大きかった。今、ケアホームに入っているが、戸惑いなく入れた。寄宿舎ではいろんな人がいて、いろんな関わりがある。

④肢体不自由の卒業生が通所している生活介護「乙訓の里」での卒業生の様子とセンター長さんから

- ・福祉の場では、体制が違うので、1対1でなくても過ごせることが必要。慣れた人とだけでなく、いろんな人を受け入れて、ガイドヘルパーなどのサービスを使っていくことも大切。お互いに、地域の中の人間として暮らしやすい地域を作っていきたい。

⑤医療的ケアが必要な卒業生が通所している「こもれび」施設長さんから

- ・愛されて育ったと思える関わりをしてほしい。それが、受け止めて生きる力になる。また、「意思表示ができる」「誰とでも食べられる」ことが大事。施設では、一人で過ごす時間があるので、趣味（好きなこと）があるとお互いが楽だと思う。

⑥知的障害が重度な生活介護「乙訓楽苑」のセンター長さんから

- ・日常生活で大切なこと「食べる」「寝る」「着替える」「排泄」の力が大切。遊びを通して、人を愛したり、好きになったり、人に愛されたりして社会の中で自分のすべき役割を果たしていけるようになっていく。

⑦「乙訓ひまわり園」の就労継続B型、生活介護ワークを担当されているセンター長さんから

- ・学校集団より大きな集団で動くので、「他との協調性」や「待つこと」「スタッフに報告できること」が求められる。一人でできる力を力として備えていってほしい。卒業後は、生活が大きく変わることを先生に知ってもらい、卒業後にしんどい思いをしないように、「集団に対応する力」「誰とでも仲よくする」「落ち着いて一人で過ごせる」ように取り組んでほしい。特に、休憩時間の過ごしがキーワードになる。
- ・就労に向けて、他者と協力する力、適切なコミュニケーション力、困りごとを相談する習慣の3点が挙げられる。

⑧「松栄堂」の工場長さんから

- ・働くために必要な力として、「あいさつ」「コミュニケーション」「自分の答えを持つ」「実行力」「粘り強さ」がある。まず、本人の熱意が大切で、与えられた仕事を精いっぱい頑張ること、臨機応変な対応力、また、与えられた仕事を成長できるチャンスととらえられる人を望む。
- ・「知覚動考」考えているだけでは前に進めない。とにかく動こう！
- ・「3年は、黙って働く。」
- ・一人の青年が「ホップ、ステップ、ジャンプ」で新たな道を考えていくなら応援したい。
- ・卒業生本人からは、「〇〇なら任せられる」と言われたいという言葉があり、常に目標を持って働いている様子が伺えた。

⑨「ワークチャレンジスタイルGOKENDO」事業長さ

んから

- ・「頑張りたい」「やり直したい」と思った時に「頑張れる場所」を作ることが就労支援事業所の役目。時間をかけた就労訓練を通じて「生きる力」と「たくましさ」を身につけること。「共生社会」は、一生懸命頑張っている人が報われる社会を目指します。

5 まとめ

上記の方々から、学校に求められる内容を聞き、研究・研修部で取った感想文の集約を読んで、進路指導部では、次のようにまとめました。

「生活介護」の施設からは、基本的な生活リズムの確立、特に「食べる」「排泄する」「寝る」などが重要だと言われています。困ったときの援助や一緒に楽しめる関係などが必要で、「いつでも」「どこでも」「だれとでも」一緒に取り組める力が大切です。「学校教育の中で育てる力が、その後の生活の土台になる」というメッセージもいただきました。

また、「愛されて育った」と感じられる関わりを、卒業までにたっぷりとしてほしいと要望もされています。地域の福祉サービス、ガイドヘルプや日中一時支援、ショートステイなどを利用して、地域の中に支援の輪を広げることも大切です。

「就労継続」のサービスを提供されている施設からは、基本的な生活習慣と合わせて、長時間働き続ける「体力」が求められます。その場に応じた挨拶や返事など、声の大きさも含め、対人関係の力も日常的に大切になります。

また、作業場面が増えるので、指示の理解や作業能力も問われます。自分から「できました。」「次の仕事は何ですか。」「ということなどは、みんなで作業を進める上で必要になります。

その他、「豊かな人間関係」や「余暇の利用」も大切な力として指摘されています。休日に部屋の中で一人でゲームに没頭する、同世代の人との関わりがほとんどない人がいないかどうかにも注意が必要です。

卒業生が就職したり、職場実習のお世話になっている企業からは、「社会に出るための土台をしっかりと身につけてください」と言われます。「挨拶と返事」「言葉づかい」「体力」などが大切です。学校という小さな社会でしっかりできないと、大きな社会ではできないということです。毎日の生活で、繰り返し身につけることが大切です。

また、友達とたっぷり取り組む関係、友達の中で評価

しあつたり課題を指摘される体験、力を合わせて作り上げる経験は学校でしかできません。学校の大きな役割であると考えています。

オンとオフを切り替えるために、趣味や余暇の時間、友達との集いなども一緒に考えていきたい事柄です。

新しく就労継続A型の事業を、企業とタイアップした形で立ち上げた「ワークチャレンジGOKENDO」の事業長さんからは、学校を卒業して、長く働くためには、「働く」ための訓練が必要であること、学校はその訓練をする場ではなく、福祉がすべきことであるというメッセージをいただきました。

「ワークチャレンジGOKENDO」や就労移行支援事業所は、生徒たちが、自分の進路を自分で決めていく上で、大きな選択肢になってくると期待しているところです。

<参照>

*1 ③のお話は、校内の縦割り研究会で行いました。